日本語教育学入門

Introduction to Teaching Japanese as a Foreign Language

姫野伴子／小森和子／柳澤絵美 著

KENKYUSHA

まえがき

本書は、これから日本語教育に携わっていきたいと考えている初学者を対象とした日本語教育学の入門書です。日本語教師を目指している方や、学習者の日本語学習を支援したいと思っている方を主な対象者としていますが、日本語教育の現場経験がある方にも、日本語教育に関わる基礎知識を再確認する目的でお使いいただけます。

本書では、普段、みなさんが何気なく使っている日本語を、1つの体系を持つ言語として客観的に捉え直し、日本語がどのような特徴を持つ言語なのか、他の言語と比較して、どんな共通点や相違点があるのかについて概観していきます。そして、日本語とは異なる特徴や体系を持った言語を母語とする人が日本語を学習する際には、どのような点が課題となり、なぜそういった問題が起こるのかについても音声学・音韻論、意味論・形態論、統語論・語用論、第二言語習得論などの言語理論を踏まえながら解説していきます。さらに、理論だけではなく、実際の教育現場で観察された学習者の誤用や、そこから得られた知見についても紹介し、指導時の留意点や具体的な指導法などにも触れていきます。

本書は、3つの分野で構成されており、一冊で、日本語の「音声」「語彙」「文法」について学ぶことができます。各課末には、練習問題があり、巻末には解答もついていますので、その課で勉強した内容を自分で復習し、確認することができます。また、課ごとに推薦図書が挙げてありますので、その分野についてさらに詳しく知りたい場合は、それらの文献にあたって、理解を深めていくことも可能です。

以下で、本書で扱う3つの分野と、その構成を紹介します。

第1部「音声」では、日本語の音声の基礎を学びます。第1課「音声と音声学」では、音声の特徴と音声学の位置づけ、および発声の仕組みについて、第2課「単音」では、日本語の母音と子音の特徴について解説します。第3課「音素」では、日本語の音声の体系について音素という概念を用いて考えます。第4課「環境や時代による音変化」では、隣接する音の影響や時代の流れによる発音の変化を取り上げます。第5課「音のまとまりとリズム」では、音節とモーラ、および、言語のリズムについて扱います。第6課「アクセント」と第7課「イントネーション・プロミネンス・ポーズ」では、声の高さの変化によって語の意味や発話意図の解釈などが変化する現象について解説します。第8課「学習者の音声と発音指導」では、学習者の日本語発話に

見られる発音上の特徴や具体的な発音指導の方法を紹介します。以上を通して、日本語の音声の特徴について理解を深め、発音指導や音声教育について考えていきます。

第 2 部「語彙」では、日本語の語彙の基礎を学びます。第 9 課「語と語構成」では、学習者は語をいくつ覚える必要があるのかを考えながら、語の単位、語の構造について解説します。第 10 課「文字」では、漢字を中心に日本語の文字について、第 11 課「語の分類 (1) 語種と位相」では、和語、漢語、外来語の分類とその違いについて整理します。第 12 課「語の意味とコーパスの活用」では、語の意味と用法、語と語の意味関係、語の意味用法を分析するのに有用なコーパスに触れます。第 13 課「語の分類 (12) 品詞とオノマトペ」では、品詞と意味の関係、音と意味の関係から、語を見つめます。最後の第 14 課「第二言語の語彙知識と知識の測定」と第 15 課「第二言語の語彙習得過程と心内辞書」は、第二言語習得の観点から、語彙の学習、テストの方法、習得の難易の要因などについて考えます。以上を通して、日本語の語彙にはどのような特徴があり、どのような点が学習者にとって習得が困難なのか考えていきます。

第 3 部「文法」では、日本語教育文法の基礎を学びます。第 16 課「語と文」では、品詞の見分け方や文の種類、第 17 課「格と主題」では、格助詞、補語、主題などを取り上げ、第 18 課「活用」では、日本語教育文法における活用の整理が学校文法とどのように異なるのか考えます。第 19 課「テンス・アスペクト」は、「する」「した」「している」などの形式、第 20 課「ヴォイス」は、自動詞・他動詞、受身、使役など、第 21 課「方向性と恩恵」は、「行く・来る」「あげる・もらう」などを扱う課です。第 22 課「モダリティ」では、文に現れる話し手の主観的な把握、最後の第 23 課「待遇表現とポライトネス」では、敬語、発話行為、ポライトネスなどがテーマです。以上を通して、日本語を外国語として学ぼうとする人に理解しやすい日本語文法を考えていきます。

本書の執筆にあたっては、言語学や日本語学、第二言語習得論などの多くの先行研究や学説を参考にさせていただきました。本書が初学者向けの入門書であるということを考慮して、全ての先行研究を出典として本文中には挙げてはおりません。これまで日本語教育学の発展に尽力してこられた先生方に、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

最後に、本書の編集においては、研究社の佐藤陽二さんと高野渉さんに大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

本書が、これから日本語を携えて世界へ羽ばたいていこうとしている方の一助となれば幸いです。

執筆者一同

目次

まえがき ——— iii

第1部 音声 ——— 001

第1課 音声と音声学 ——— 002

1.1 音声の性質と研究の領域 ——— 002
1.2 調音器官：音声を作る場所と声の道 ——— 004
1.3 音声を作る仕組み：ノドがブルブルする ——— 006

第2課 単音 ——— 009

2.1 日本語の母音：「* 疲れていたので、たくさん煮ました」 ——— 009
2.2 日本語の子音：「* 退学に行きます」「? ありがとうごじゃいます」「* びっくにしました」 ——— 011

第3課 音素 ——— 020

3.1 音声学と音韻論："Light" も "Right" も「ライト」？ ——— 020
3.2 特殊拍音素：「* 様を食べます」「* ピカソは学科です」「* 毎日ビルを飲みます」 ——— 022
3.3 音と表記の対応 ——— 024
COLUMN 1 外来語に見られる母音挿入 ——— 028

第4課 環境や時代による音変化 ——— 029

4.1 同化：「やばい」は「やべえ」になる ——— 029
4.2 現代の日本語に見られる音変化：「『つくえ』に『う』がありません」 ——— 030
4.3 歴史的な音変化 ——— 033
COLUMN 2 音位転倒 ——— 037

第5課 音のまとまりとリズム ——— 038

5.1 音節：「たまご」は3つで「たんご」は2つ ——— 038
5.2 モーラ：「たまご」は3つで「たんご」も3つ ——— 040
5.3 フット：1モーラ+1モーラ=1フット ——— 042
5.4 リズム：日本語は機関銃のリズム? ——— 043

第6課 アクセント ——— 046

6.1 アクセントとは何か：「まっちゃいろ」は何色? ——— 046
6.2 アクセントの規則・機能・型：「あなた」と「わたし」は違うグループ? ——— 048
6.3 特定の条件下におけるアクセント ——— 050

第7課 イントネーション・プロミネンス・ポーズ —— 054
7.1 イントネーション：「これじゃない」は「これ」なのか「これじゃない」のか? —— 054
7.2 イントネーションの種類 —— 056
7.3 プロミネンスとポーズ：目立たせたり、黙ったり —— 058

第8課 学習者の音声と発音指導 —— 062
8.1 学習者の日本語音声に見られる特徴 —— 062
8.2 発音指導の方法：三角形をなぞってリズムの練習？ —— 064
8.3 発音指導について考える —— 066

第2部
語彙 —— 071

第9課 語と語構成 —— 072
9.1 言語習得の出発点：「* 国の家族を見たいです」「* 変えってください」 —— 072
9.2 語の単位：「食べる」「食べた」「たべて」は同じ語か違う語か —— 074
9.3 語の構成：「* 私に対して15万円の家賃は高すぎる」 —— 076
COLUMN 3 「目の薬」と「目薬」、「大きな穴」と「大穴」 —— 082

第10課 文字 —— 083
10.1 文字と音の関係：「* ええがをみます」 —— 083
10.2 漢字の学習：「いきる」「うまれる」「なま」「がくせい」「いっしょう」 —— 085
10.3 漢字の知識：「* 髪の毛を整理しました」 —— 087

第11課 語の分類(1) 語種と位相 —— 091
11.1 語種：「* 友だちに会う約束を解約しました」 —— 091
11.2 位相と文体：「* お父さん、あなたは今日何時に帰りますか?」 —— 093

第12課 語の意味とコーパスの活用 —— 097
12.1 語の意味：「? スーパーで10キロのご飯を買いました」 —— 097
12.2 語と語の関係：「? クーラーがついているので、暑くないです、寒いです」 —— 099
12.3 比喩：「『医者のタマゴ』は、『医者が食べるタマゴ』という意味ですか?」 —— 101
12.4 コーパスの活用：共起語や意味の違いを比較するために —— 104

第13課 語の分類(2) 品詞とオノマトペ ―― 107

13.1 品詞：「? 一流なホテルに泊まりたいです」 ―― 107
13.2 オノマトペ：「* ドアがバタン閉まりました」 ―― 111

第14課 第二言語の語彙知識と知識の測定 ―― 115

14.1 知識の側面：意味はわかるが読めない語もある ―― 115
14.2 語彙知識の測定（1）：テストの方法 ―― 117
14.3 語彙知識の測定（2）：テストで測る知識の側面 ―― 119
14.4 語彙知識の測定（3）：テストの良し悪し ―― 121

第15課 第二言語の語彙習得過程と心内辞書 ―― 125

15.1 学習のしやすさ：「電気」を「つく」？「つける」？ ―― 125
15.2 語彙の学習方法：「込んでいる＝ comb でいる」 ―― 127
15.3 心内辞書と意味推測：「『洗い出す』は『洗ってから出す』という意味ですか?」 ―― 129
COLUMN 4 第二言語の語彙習得が第一言語の語彙習得と異なる点は? ―― 133

第3部 文法 ―― 135

第16課 語と文 ―― 136

16.1 文法：「* が全員 覚えるさせるられるますた を教科書。」 ―― 136
16.2 品詞：「* 欲しいます」「* 病気な人」 ―― 139
16.3 文の種類：「* 試験が終わると、遊びに行きましょう」 ―― 141

第17課 格と主題 ―― 145

17.1 格助詞：「猫がネズミを追いかけた／猫をネズミが追いかけた」 ―― 145
17.2 間違えやすい格助詞：「* 図書館に勉強します」 ―― 147
17.3 主題：「開けた人は閉めてください／開けたドアは閉めてください」 ―― 150

第18課 活用 ―― 154

18.1 動詞活用：文を終止できるのは終止形だけ? ―― 154
18.2 五段動詞（I型）と一段動詞（II型）：「* 雪が降て、5センチ積もました」 ―― 156
18.3 形容詞の活用：「* 昨日は、忙しいでした」 ―― 158

COLUMN 5　未来の丁寧体活用表? ——— 162

第19課　テンス・アスペクト ——— 163

19.1　主節のテンス：「中野にキャンパスがある／中野でコンサートがある」 ——— 163
19.2　従属節のテンス：「* 走った前に準備体操をしました」 ——— 165
19.3　アスペクト：「もうお花見しましたか」「* いいえ、しませんでした」 ——— 168

第20課　ヴォイス ——— 172

20.1　動詞の自他と「ている／てある」：「* 電気がつけています」 ——— 172
20.2　受身：「かばんが盗まれた／かばんを盗まれた」 ——— 174
20.3　使役・可能・自発・「見える／聞こえる」：「?? あ、富士山が見られます!」 ——— 177

第21課　方向性と恩恵 ——— 181

21.1　移動：「? 田中さんが私に宅配便を送りました」 ——— 181
21.2　授受：「* 彼は私に本をあげました」 ——— 184
21.3　恩恵の授受：「# 私はあなたにお土産を買ってきてあげました」 ——— 186

第22課　モダリティ ——— 190

22.1　モダリティの種類：「* 悪いけど、私、もう帰ろう」 ——— 190
22.2　対事モダリティと関連づけのモダリティ：「* 来るだろうが、来ないだろう」 ——— 192
22.3　対人モダリティ：「* いいですねと思います」 ——— 195

第23課　待遇表現とポライトネス ——— 199

23.1　敬語：「* 昨日はお風呂にお入りした後、テレビを拝見しました」 ——— 199
23.2　発話行為：「# すみません、1,000円お貸しになりませんか」 ——— 201
23.3　ポライトネスと配慮：「ねえ、さっちゃん、教科書、一緒に見よう」 ——— 204
COLUMN 6　文法と語用論 ——— 208

練習問題の解答 ——— 209
参考文献 ——— 220　　索引 ——— 231

本書の表記について

本文中で使われている記号の意味は、それぞれ以下の通りである。

***** ：文法的に容認されない文（非文）、または、音声的、語彙的な側面で不適格な語や句、文など
? ：非文とは言えないが、容認度が低く、不自然に感じられる文、または、音声的、語彙的な側面で不自然に感じられる語や句、文など
?? ：? より容認度や自然さがさらに低く感じられる語や句、文など
：与えられた文脈において不適切な語や句、文など

第一部

音声

第1課
音声と音声学

1.1　音声の性質と研究の領域

1.1.1 音声の特徴とは？

私たちは、普段、いろいろな人とさまざまな話題について音声を用いてコミュニケーションをしていますが、何気なく生成しているこの音声は、どのような特徴を持っているのでしょうか。ここでは、音声の特徴について概観していきたいと思います。

みなさんは「りんご」という語と「みかん」という語を同時に発音することができますか。おそらくできる人はいないでしょう。これは、ヒトが2つの言語音を同時に発音することができず、一つひとつの音を時間軸上に順番に並べることしかできないからです。このような音声の特徴を、言語学の用語で**線条性**（せんじょうせい）と言います。

次に、音声は目に見えないという特徴があります。作文やレポートを書いて、後で内容や表現などを確認したいとき、私たちは書いた文章をもう一度見て、読み直すことができます。しかし、音声の場合は、同じようにはいきません。例えば、“Right”という語を発音して、Rの音が正しく発音できていたか確認したいとき、音声の場合は、録音をしていない限り、同じ音声をもう一度聞いて確認することはできません。これは、音声が現れては消える音の連続体であり、文字のように跡を残すことがないという特徴を持っているためです。発音や口頭表現の授業では、学習者の音声を録音し、学習者自身が自分の発音を分析・評価する課題を課すことがあります。この場合は、同じ音声を何度でも聞き直すことができますが、ある音の発音が適切かどうかを聞き分ける力がなければ、自分が苦手な発音を見つけて練習していくことはできません。そのため、音声の学習には、話す力だけでなく、聞く力も必要になります。

さらに、音声には、多くの要素が含まれていることもその特徴として挙げられます。例えば、「あめ（雨）」と「あめ（飴）」は高さが違いますし、「ビル」と「ビール」は長さが違います。意見を強く主張したいときと控えめに話したいときでは、声の大きさや息の強さなどが異なります。部屋で友だちと2人で話しているときと、広いホールで大勢の人の前でスピーチをするときでは、話す速度やポーズ（短い休み）の有無、滑舌や声の張りなども違ってくるでしょう。このように、音声には多くの要素が含まれ

ており、そのおかげで、私たちは自分の意見や感情を豊かに表現することができるのです。

1.1.2 音声学の分野

1.1.1 で見てきたように、音声は 1 人の発音においては、時間軸上に一つずつしか音が並ばないという点でシンプルですが、その姿は目に見えないため確認が難しく、さらに、高さ、長さ、速さ、音質などのさまざまな要素を含んでいるため、その学習と習得は一筋縄ではいきません。したがって、学習者だけでなく、言語を教える側の教師も、効果的な発音指導につなげていくために、音声について体系的に学び、学習者や自身の音声を分析していく力を身につけておくのが理想的です。それでは、そもそも、音声はどのように分析したり記述したりしていけばよいのでしょうか。

音声について研究する分野を**音声学**と言います。音声学には、いくつかの種類があり、その種類によって分析の仕方も変わってきます。音声が発せられる場面を考えてみましょう。そこには、「音声を発音する人」と「音声を聞く人」、さらに、両者の間には、空気中を伝わる「物理的な音の波」が存在します（図 1.1 参照）。音声学の分野は、この 3 つのどの点に注目するかによって分類されています。

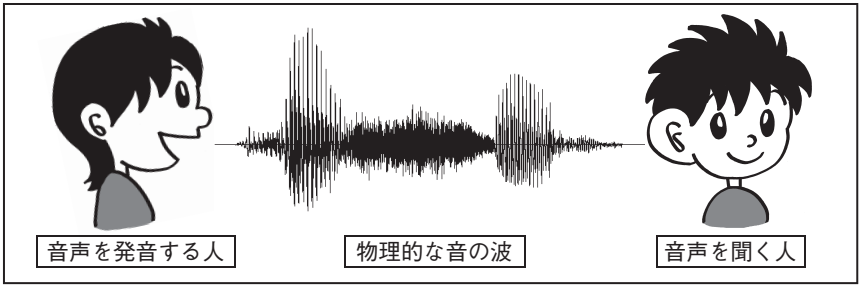


図 1.1　音声が発せられる場面

まず、「音声を発音する人」が唇や舌などをどのように動かしてその音を発音しているのかを研究する分野を**調音音声学**と言います。次に、発音された音声は、音の波となって空気中を伝わっていきますが、その波が物理的にどのような特徴を持っているのかを研究する分野を**音響音声学**と言います。最後に、音声を聞く人がどのように音声を知覚・認識するのかを研究する分野を**聴覚音声学**と言います。

1.2　調音器官：音声を作る場所と声の道

学習者に発音の指導をする際、教師は、学習者の音声がどのように発音されたもので、どこに問題があるのか、そして、どう修正すれば目標とする発音に近づけるのかを分析・検討していかなければなりません。そのためには、まず、口や鼻などの**調音器官**（**音声器官**）の構造を知っておく必要があります。ここでは、発音に関わる各器官の位置と名称を確認していきましょう。図 1.2 に、首から上の部分を真ん中から縦に 2 つに割った**声道断面図**（**正中断面図**、**口腔断面図**）を示します。

まず、鼻の中の空洞を（A）**鼻腔**、口の中の空洞を（B）**口腔**と言います。次に、上顎の部分を前から順番に見ていくと、一番前に唇があります。音声学では「うわくちびる」ではなく、①**上唇**と呼びます。上唇の後ろには、前の歯があります。これを②**上歯**と言います。上歯の後ろの少し盛り上がっている部分は、前と後ろに分かれており、前の方を③**歯茎**、後ろの方を④**後部歯茎**（**硬口蓋歯茎**）と言います。盛り上がっている部分の後ろにはドーム状の硬い骨のある部分があります。ここも前後に分かれており、前の部分を⑤**歯茎硬口蓋**、後ろの部分を⑥**硬口蓋**と言います。さらに、口の奥へ進むと、硬い部分がなくなり、骨のない軟らかい部分が出てきます。ここを⑦**軟口蓋**と言います。軟口蓋の後部全体は（C）**口蓋帆**と呼ばれ、その先端を⑧**口蓋垂**と言います。口蓋帆は、鼻への息の通り道を開けたり閉じたりする重要な働きをする器官です。

次に、下顎の部分を見ていくと、まず、⑨**下唇**があります。その後ろには、下の歯と下の歯茎がありますが、これらの器官は発音には関わりません。次に、**舌**の各部分を見ていきましょう。まず、舌の先端の尖った部分を⑩**舌尖**と言い、舌の一番前の平面の部分を⑪**舌端**と言います（舌尖と舌端を合わせて**舌先**と言うこともある）。舌端に続く前の方の舌を⑫**前舌**、後ろの方の舌を⑬**後舌**と言います（前舌と後舌の間の部分を**中舌**と言うこともある）。そして、舌の付け根の部分を**舌根**と言います。

最後に、ノドの部分を見ていきましょう。まず、口を開けたときに前から見えるノドの壁を⑭**咽頭壁**と言います。そして、咽頭壁や口蓋垂などがある浅い部分のノドを（D）**咽頭**、咽頭より深い部分のノドを（E）**喉頭**と言います。喉頭には振動することで基本的な声を作る⑮**声帯**があります。さらに、声帯の間の隙間を⑯**声門**と言います。ノドの奥は二股に分かれており、肺へと通じる息の通り道を⑰**気管**、胃へと通じる飲食物の通り道を**食道**と言います。そして、飲食物が気管に入るのを防ぐ弁の役割をしている部分を⑱**喉頭蓋**と言います。

ここまで調音に関わる各器官を見てきましたが、声帯から上の息の通り道を**声道**と

言います。声道には、「口のみ」「鼻のみ」「口と鼻の両方」という3つの種類があり、口からのみ息を通す音を**口音**（こうおん）、鼻からのみ息を通す音を**鼻音**（びおん）と言います。そして、口と鼻の両方に息を通す音を**鼻母音**（びぼいん）と言います。

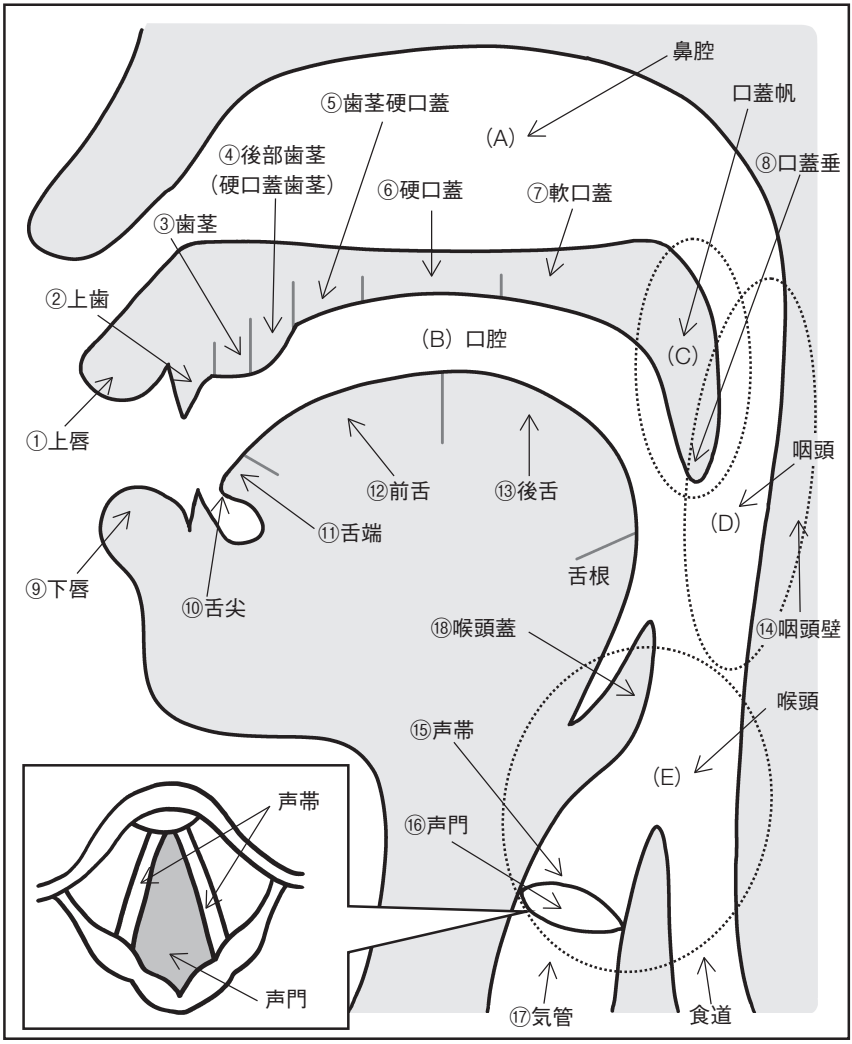


図 1.2　声道断面図と調音器官

1.3　音声を作る仕組み：ノドがブルブルする

1.3.1 音声の作り方

料理を作るとき、私たちは、野菜、肉、魚などの材料を用意して、その材料を煮たり焼いたりして、料理を完成させます。音声を作るときにも料理と同じように、「材料」と「加工」が必要です。音声を作る材料は、息の流れです。息の流れには2種類あり、1つは、吸う息の**吸気**、もう1つは、吐く息の**呼気**です。日本語を発音する際には、主に呼気を使います。次に、その材料（＝息）を加工します。音声の加工には、2つの段階があり、まず、声帯を振動させて基本的な声を作ります。これを**発声**と言います。次に、唇や舌を動かしたり鼻に息を通したりすることで、さまざまな音を生成します。これを**調音**と言います。音声の作り方をまとめると次のようになります。

［呼気 または 吸気］＋［発声］＋［調音］＝［音声］

1.3.2 声帯と声帯振動

「パリへ行きました」と「バリへ行きました」という文を聞いたとき、日本語母語話者は、フランスへ行ったのか、インドネシアへ行ったのかがすぐにわかります。しかし、日本語学習者は、この違いを区別できないことがあります。それはなぜでしょうか。「パリ」と「バリ」をローマ字で書くと「pari」と「bari」になり、この2つの語は、「p」と「b」の部分が違っていることがわかります。「p」と「b」は、音声学的に何が違うのでしょうか。そこには、声帯の動きが大きく関係しています。

声帯とは、首の真ん中辺り（男性の「喉仏」がある辺り）に位置する左右一対の筋肉の塊で、上記1.3.1で述べた発声をする器官です。ノドに手をあてて、「静かにしてください」という意味で使う「シー」と言ってみましょう。次に、「アー」と言ってみましょう。「アー」を発音したときに、手にブルブルと振動が伝わってくるのがわかるでしょうか。これを**声帯振動**と言います。そして、「アー」のように声帯振動を伴って発音する音を**有声音**、「シー」のように声帯振動を伴わずに発音する音を**無声音**と言います。先ほどの「p」と「b」を比べると、「p」は無声音、「b」は有声音であり、声帯振動の有無が「p」と「b」の音声的な違いであることがわかります。日本語には無声音と有声音の対立があるため、日本語母語話者は、その違いがすぐにわかります。しかし、その対立を持たない言語（中国語や韓国語など）の母語話者には、「パリ」も「バリ」も同じように聞こえるため、区別が難しいのです。反対に、中国語や韓国語では対立があり、日本語では対立がない音もあります。その1つは、有気音と無気音です。

肺からの強い呼気（帯気（たいき）/ 気音（きおん）/ アスピレーション）を伴う音を**有気音**、伴わない音を**無気音**と言います。どのような音かイメージしづらい場合は、ティッシュペーパーを広げて口の前にかざし、「パ」という音を発音してみましょう。ティッシュペーパーが大きく揺れれば有気音、全く揺れなければ無気音です。

有声音、無声音、有気音、無気音は、声帯振動が起こるタイミングで説明することができます。図 1.3 に、声帯振動が起こるタイミングを示します。図の縦線①は口を閉じた時点（閉鎖の開始）を、縦線②は口を開いた時点（閉鎖の開放）を表しています。斜線の部分は母音「a」を示しており、＿＿線は声帯振動を表しています。(A) のように口を閉じている子音の段階から声帯振動が始まっている「b」は有声音です。一方、(B) や (C) のように、口を閉じているときには声帯振動がなく、口を開けた後で声帯振動が始まる「p」や「p^h」は無声音です。無声音の中で、(C) のように口を開けてから声帯振動が始まるまでに少し時間があり、そこに帯気があるものは有気音、(B) のように帯気がないものは無気音です。なお、母音の「a」はすべて有声音です。

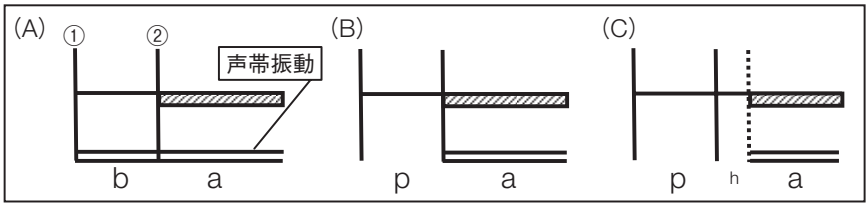


図 1.3　声帯振動のタイミング

無声音や有声音の例で見たように、声帯がどのような状態にあるかによって発音される音声に違いが出てきます。図 1.4 の (a)～(d) に、声帯のおおまかな形状を示します。(a) は有声音の発音時の形状で、声帯振動によって開閉を繰り返している声帯が閉じた瞬間を切り取った図です。(b) はささやき声、(c) は無声音の発音時の形状です。(d) は呼気や吸気が自由に通過できる状態で、呼吸をしているときの形状です。

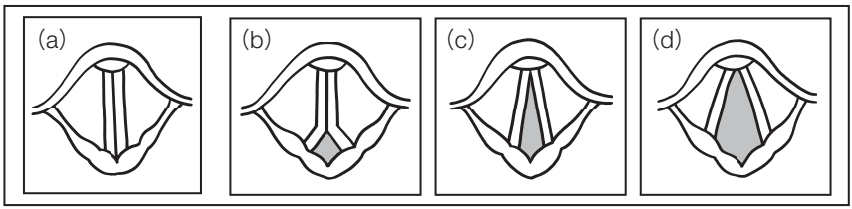


図 1.4　声帯の形状

練習問題　第1課　音声と音声学

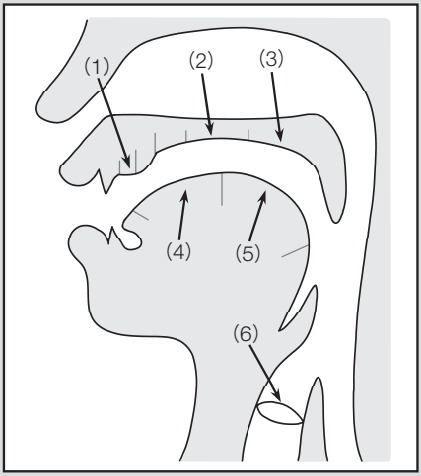
【練習問題 1】

以下の（1）～（4）の動作をするとき、声帯は振動していますか。実際にその動作をして、確認してみてください。

（1）ローソクの火を吹き消すとき
（2）鼻歌を歌っているとき
（3）遠くにいる友だちに向かって「おーい！」と呼びかけるとき
（4）寒いので両手に「は～っ」と息を吹きかけているとき

【練習問題２】

以下の図の調音器官の名称を選択肢①～⑩の中から選んでください。



① 後部歯茎
② 軟口蓋
③ 歯茎
④ 後舌
⑤ 硬口蓋
⑥ 舌根
⑦ 声帯
⑧ 口蓋垂
⑨ 歯茎硬口蓋
⑩ 前舌

【推薦図書】

小泉保（2003）『改訂 音声学入門』大学書林.
福盛貴弘（2010）『基礎からの日本語音声学』東京堂出版.
松崎寛・河野俊之（1998）『よくわかる音声』（日本語教師・分野別マスターシリーズ）アルク.

第2課 単音

2.1 日本語の母音:「*疲れていたので、たくさん煮ました」

2.1.1 母音と子音の違い

言語の発音や綴りを学ぶ際、母音と子音という用語がよく使われますが、この2つは、何が違うのでしょうか。

母音は、基本的に①鼻を使わない音（口音）であり、②声帯振動を伴う音（有声音）です。そして、③肺からの呼気を妨害せずに、口腔内で共鳴を起こすことで作られる音です。例えば、母音の「a」は鼻をつまんでも問題なく発音でき、ノドを触ってみるとブルブルするので、声帯振動があることがわかります。そして、鏡を見ながら発音してみると、口の中がよく見え、唇や舌が邪魔をしていないことがわかるでしょう。

子音は、①口を使う音（口音）も鼻を使う音（鼻音）もあり、②声帯振動を伴う音（有声音）も伴わない音（無声音）もあります。そして、③唇や舌を使って、閉鎖を作ったり、狭（せば）めを作ったりして、呼気や吸気を妨害することで作られる音です。例えば、「m」と「s」を発音してみると、「m」は鼻をつまむと発音できませんが、「s」は問題なく発音できます。次に、ノドを触ってみると、「m」は声帯振動がありますが、「s」は声帯振動がありません。そして、「m」は両唇で口腔に閉鎖を作ることで、「s」は舌を歯茎に近づけて息の通り道を狭めることで、肺からの息の流れを邪魔していることがわかるでしょう。

この母音や子音といった音を記述するために、広く用いられているのが、**IPA**（International Phonetic Alphabet）と呼ばれる記号です。日本語では、**国際音声記号**、または、**国際音声字母**と言います。IPAは、国際音声学会によって定められたもので、[a]、[m]、[s] などのように［ ］の中に入れて示します。このIPAには、一つひとつの音の細かい特徴までできるだけ正確に記述しようとする**精密表記**と、なるべく簡単に記述しようとする**簡易表記**があります。IPAを用いて示される音声学におけるもっとも小さい単位を**単音**と言います。本書でも、これ以降は、発音を示す際にIPAを使っていきたいと思います。

2.1.2 母音を分類する要素

日本語の母音は、「あ」「い」「う」「え」「お」の5つです。上記2.1.1で、母音と子音の違いについて述べましたが、それでは、この5つの母音にはどのような違いがあるのでしょうか。母音の分類には、3つのポイントがあります。

1）唇の丸めの有無：唇を丸めて発音しているかどうか

唇の丸めを伴う母音を**円唇母音**、伴わない母音を**非円唇母音**と言います。

2）舌の前後の位置：舌のもっとも盛り上がっている点が口腔の前寄りか後寄りか

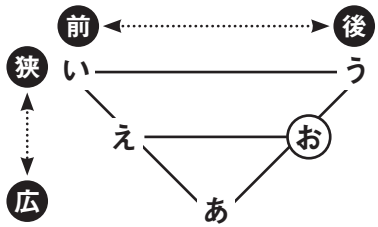
舌の盛り上がりが口腔の前寄りにある母音を**前舌母音**、後寄りにある母音を**後舌母音**と言います。

3）口の開き具合（舌の盛り上がりの高さ）：口の開き具合が広いのか狭いのか

口の開き具合が広い母音を**広母音**（**低母音**）、狭い母音を**狭母音**（**高母音**）と言います。そして、広母音と狭母音の間に位置する母音を**半狭・半広母音**（**中母音**）と言います。

以上の1）～3）の観点で分析していくと、母音を分類することができます。また、1）～3）の特徴を順番に並べると、各母音の名称になります。

図2.1に、日本語の母音の特徴を示した模式図と各母音の名称、および、IPAを示します。（「あ」は舌の前後位置が後ろ寄りの母音ですが、それについては特に示さず、非円唇広母音と呼ばれることが多いです。「う」は非円唇母音であり、IPAは［ɯ］を用います。円唇の場合は［u］で示されます。）



「あ」［a］　非円唇・（後舌）・広母音
「い」［i］　非円唇・前舌・狭母音
「う」［ɯ］　非円唇・後舌・狭母音
「え」［e］　非円唇・前舌・中母音
「お」［o］　円唇・後舌・中母音

※「・」は見やすいように便宜的に挿入

図2.1　日本語の母音

母音には、「あさ［asa］」や「おと［oto］」のように短く発音されるものと、「おかあさん［okaːsaɴ］」や「コート［koːto］」（［ː］は、その前にある音が伸びていること

を表す記号）のように長く発音されるものがあります。また、母音が連続したとき、英語の「eye」のように、2つの母音の間に切れ目がなく、滑らかに変化していく母音を**二重母音**、日本語の「愛（あい）」のように、切れ目があり、それぞれの母音がはっきりと発音される母音を**連母音**と言います。

日本語を学ぶ学習者の母語の母音体系が日本語の母音体系とは異なる場合、日本語の母音が適切に発音されないことがあります。例えば、母語が［a］［i］［u］の3母音体系の言語を母語とする学習者の場合、「寝ました［nemaçita］」と発音したつもりが、日本語母語話者には「煮ました［nimaçita］」のように聞こえることがあります。母音は、調音の際に舌が上顎に接触しないため、舌の位置などを自分で確認して内省することが難しいのですが、口の開き具合や唇の形などを意識して練習することで、発音の改善につなげていくことができます。

2.2 日本語の子音:「*退学に行きます」「?ありがとうございます」「*びっくにしました」

2.2.1 子音を分類する要素

2.1で見たように、子音には口音も鼻音もあり、有声音も無声音もあります。では、一つひとつの子音は、どのように分類すればよいのでしょうか。子音の分類には、3つのポイントがあります。

1）声帯振動の有無：声帯が振動しているかどうか

日本語には、有声音と無声音の対立があるため、声帯が振動しているかどうかは、日本語の子音を分類するための重要なポイントの1つです。

2）調音点：息を妨害する場所

子音を調音するために、唇や舌を使って息を止めたり、息の通り道を狭くしたりする場所のことを**調音点**と言います。

3）調音法（調音様式）：息を妨害する方法

子音を調音するために、鼻への息の通り道を開閉したり、唇や舌を使って閉鎖や摩擦などを作ったりして息を妨害する方法のことを**調音法**と言います。

上記の1）～3）の観点で分析していくと、子音を分類することができます。また、1）

～3）の特徴を順番に並べると、子音の名称になります。ここでは、この3つのポイントを確認しながら、日本語の子音の特徴について見ていきます。［　］にIPA、「:」以下に子音の名称を示し、その子音を調音する際の声道断面図も表示します。

① カクケコの子音［k］　キ・キャ行の子音［k^j］：無声軟口蓋破裂音

カ行・キャ行の子音は、声帯振動を伴わない無声音です。調音の際には、後舌を軟口蓋に接触させて閉鎖を作るため、調音点は**軟口蓋**です。そして、その閉鎖を一気に開放し、破裂させることで発音するため、調音法は**破裂音**（**閉鎖音**）と呼ばれます。

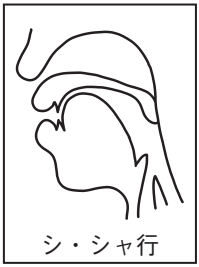
イ段の子音である「キ」には、口蓋化が起こります。**口蓋化**とは、イ段の子音を調音している最中に、次に来る母音［i］の準備が始まることによって、舌の中舌面が硬口蓋に向かって盛り上がる現象です。IPAでは、調音点が変化しない程度の口蓋化の場合は、音声の特徴を細かく記述するための**補助記号**［^{j}］を付けて、［k^j］のように表します。また、口蓋化した子音に［a］、［ɯ］、［o］が後続すると、小さい「ャ、ュ、ョ」がついた**拗音**（ようおん）になります。IPAの表記をまとめると、カ行は、［ka］［k^ji］［kɯ］［ke］［ko］、キャ行は、［k^ja］［$k^jɯ$］［k^jo］のようになります。なお、拗音は、補助記号の［^{j}］を用いた［k^ja］だけではなく、補助記号［^{j}］、および、［j］を用いた［k^jja］や、［j］のみを用いた［kja］のように表記されることもあります。

②ガグゲゴの子音［g］　ギ・ギャ行の子音［g^j］：有声軟口蓋破裂音
ガグゲゴの子音［ŋ］　ギ・ギャ行の子音［$ŋ^j$］：軟口蓋鼻音

ガ行・ギャ行の子音には、2つの調音の仕方があります。1つは、①のカ行の子音の調音点と調音法は変化させずに、声帯を振動させて有声音で発音する［g］と［g^j］です。もう1つは、口蓋帆を下げて、鼻に息を通して発音する［ŋ］と［$ŋ^j$］です（ここではかなに「゜」を付けて表示）。この子音は、ガ行鼻濁音（☞4.2）と言われ、語中の環境において、観察されることがあります。調音には鼻を使うため、調音法は**鼻音**と呼ば

れます。イ段の「ギ」「ギ」と「ギャ行」「ギャ行」の子音は、破裂音の場合も鼻音の場合も口蓋化して発音されます。

③サスセソの子音［s］　：無声歯茎摩擦音
シ・シャ行の子音［ɕ］：無声歯茎硬口蓋摩擦音



サ行・シャ行の子音は、声帯振動を伴わない無声音です。サ・ス・セ・ソの調音の際には、舌先を歯茎に近づけて狭い隙間を作るので、調音点は**歯茎**です。そして、その隙間に息を通して摩擦を起こすことで発音するため、調音法は**摩擦音**と呼ばれます。イ段の「シ」と「シャ行」の子音を調音する際には、口蓋化が起こって舌の盛り上がりが歯茎より後ろにずれるため、調音点は**歯茎硬口蓋**に移動します。口蓋化によって調音点が変化した場合、IPA 表記では、補助記号の［ʲ］は用いず、シは［ɕi］、シャは［ɕa］のように、口蓋化していない子音とは異なる IPA を用いて表します。

④ザズゼゾの子音　［z］：有声歯茎摩擦音
［dz］：有声歯茎破擦音
ジ・ジャ行の子音［ʑ］：有声歯茎硬口蓋摩擦音
［dʑ］：有声歯茎硬口蓋破擦音

ザ行・ジャ行の子音には、2 つの調音の仕方があります。1 つは、③のサ行の子音の調音点と調音法は変化させずに、声帯を振動させて、有声音で発音した摩擦音の［z］と［ʑ］です。もう 1 つは、調音の際に、舌を上顎に接触させて閉鎖を作り、その後、舌と上顎の間に狭い隙間ができる程度にその閉鎖を開放し、息を通すことで摩擦を作る音です。この調音法は、破裂音的な要素と摩擦音的な要素の両方を持っているため**破擦音**と呼ばれ、IPA では、［dz］と［dʑ］を用いて表されます。イ段の「ジ」、および、「ジャ行」の子音は、摩擦音の場合も破擦音の場合も口蓋化して発音され、調音点は、**歯茎硬口蓋**に移動します。

⑤タテトの子音［t］　：無声歯茎破裂音
チ・チャ行の子音［tɕ］：無声歯茎硬口蓋破擦音
ツの子音［ts］　：無声歯茎破擦音

タ行・チャ行の子音は、声帯振動を伴わない無声音です。タ・ツ・テ・トは、舌先と歯茎で閉鎖を作って調音される音であるため、調音点は**歯茎**です。イ段の「チ」と「チャ行」の子音は、口蓋化し、調音点が**歯茎硬口蓋**に移動します。調音法については、タ・テ・トは**破裂音**、チとツは**破擦音**で発音されます。IPA では、タ・テ・トは［t］、チは［tɕ］、ツは［ts］で表されます。

⑥ダデドの子音［d］：有声歯茎破裂音

ダ行の子音は、⑤のタ・テ・トの子音の調音点と調音法は変化させずに、声帯を振動させて、有声音で発音した音です。なお、「ヂ」と「ヅ」は、④で説明したザ行の「ジ」「ズ」と調音点や調音法、IPA の記号などがすべて同じです。

⑦ナヌネノの子音［n］　：歯茎鼻音
ニ・ニャ行の子音［ɲ］：歯茎硬口蓋鼻音

ナ行・ニャ行の子音は、すべて声帯振動を伴う有声音で発音されます（同じ調音点と調音法で、有声・無声の対立がなく、有声音の子音しかない場合は、子音の名称に「有声」と明記しなくてもよい）。ナ・ヌ・ネ・ノの調音点は**歯茎**ですが、イ段の子音である「ニ」と「ニャ行」の子音の調音点は、口蓋化によって調音点が移動するため**歯茎硬口蓋**になります（［ɲ］は硬口蓋鼻音を示す IPA だが、歯茎硬口蓋は前部硬口蓋とも呼ばれ、硬口蓋の一部であるため、硬口蓋鼻音の IPA を用いて表す）。ナ行の子音は、口蓋帆を下げて、鼻に息を通すことで発音されるため、調音法は**鼻音**です。

⑧ハヘホの子音［h］　：無声声門摩擦音
ヒ・ヒャ行の子音［ç］：無声硬口蓋摩擦音
フの子音［ɸ］　：無声両唇摩擦音

ハ行とヒャ行の子音は、声帯振動を伴わない無声音です。調音点は、ハ・ヘ・ホは**声門**、イ段の子音で口蓋化するヒは**硬口蓋**、フは上唇と下唇を近づけて調音されるため**両唇**です。調音法は、口腔内に狭い隙間を作り、その隙間に息を通すため**摩擦音**です。IPA では、ハ・ヘ・ホは［h］、ヒ・ヒャ行は［ç］、フは［ɸ］で表されます。

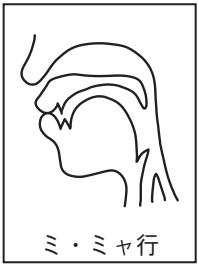
⑨パプペポの子音［p］　ピ・ピャ行の子音［p^j］：無声両唇破裂音

パ行・ピャ行の子音は、声帯振動を伴わない無声音です。上唇と下唇で閉鎖を作るため、調音点は**両唇**です。そして、その閉鎖を一気に開放し、破裂させることで発音するため、調音法は**破裂音**です。イ段の「ピ」、および、「ピャ行」の子音は、口蓋化しますが、調音点が変わるほどの大きな舌の移動はないため、IPA では、パ・プ・ペ・ポの子音［p］に補助記号の［^{j}］を付けて［p^j］で表します。

⑩バブベボの子音［b］　ビ・ビャ行の子音［b^j］：有声両唇破裂音

バ行・ビャ行の子音は、⑨のパ行の調音点と調音法は変化させずに、声帯を振動させて、有声音で発音した音です。イ段の「ビ」、および、「ビャ行」の子音は、口蓋化するため、IPA では、補助記号の［^{j}］を付けて［b^j］のように表します。

⑪マムメモの子音［m］　ミ・ミャ行の子音［mʲ］：両唇鼻音



マ行・ミャ行の子音は、声帯振動を伴う有声音です。上唇と下唇を接触させて唇を閉じて調音するため、調音点は**両唇**です。そして、口蓋帆を下げ、鼻に息を通して発音するため、調音法は**鼻音**です。イ段の子音「ミ」、および、「ミャ行」の子音は、口蓋化するため、IPAでは、補助記号の［ʲ］を付けて［mʲ］のように表します。

⑫ヤユヨの子音［j］：硬口蓋接近音

ヤ行の子音は、声帯振動を伴う有声音です。舌の盛り上がりは、硬口蓋で一番高くなるため、調音点は**硬口蓋**です。ヤ・ユ・ヨの子音は、口腔内に摩擦音ほどは狭くない隙間を作り、そこに息を通すことで発音されます。舌が上顎に近づくため、この調音法は**接近音**と言われます。ヤ行の子音を発音するときの口の形は、母音の［i］と同じなので、**半母音**と呼ばれることもあります。

⑬ラルレロの子音［ɾ］　リ・リャ行の子音［ɾʲ］：歯茎弾き音

ラ行・リャ行の子音は、声帯振動を伴う有声音です。舌が歯茎に軽く接触するので、調音点は**歯茎**です。舌先で歯茎を軽く叩くことで発音されるため、調音法は**弾き音**と言われます。イ段の「リ」、および、「リャ行」の子音は、口蓋化するため、IPAでは、補助記号の［ʲ］を付けて［ɾʲ］のように示します。

⑭ワの子音［ɰ］：軟口蓋接近音

ワの子音は、声帯振動を伴う有声音です。舌の盛り上がりが軟口蓋にあるので、調音点は**軟口蓋**です。ワの子音の調音法は、口腔内に摩擦音ほどは狭くない隙間を作り、そこに息を通して発音する**接近音**です。ワの子音を発音するときの口の形は、母音の［ɯ］と同じであるため、**半母音**と呼ばれることもあります。

⑮ ン（後続音がない場合）［N］：口蓋垂鼻音

「ン」には、いくつかの異音があり（☞ 3.2.1）、後続する音によって異なる音で実現されます。ここでは、「にほん」「読みません」などのように、後続する音がない場合の「ン」について紹介します。この「ン」は、声帯振動を伴う有声音です。舌と口蓋垂で閉鎖を作って口腔への呼気の通り道をふさぐため、調音点は**口蓋垂**です。そして、鼻腔に呼気を通して調音するため、調音法は**鼻音**です。IPA では、［N］を用いて表されます。

ここまで見てきたように、子音の分類には、1）声帯振動の有無、2）調音点、3）調音法の 3 つが重要なポイントになります。そして、それぞれのポイントを適切に調整して発音しないと、日本語母語話者には、異なる語や意味のない語に聞こえてしまう場合があります。例えば、学習者の日本語発話には、有声音である［d］を無声音の［t］で発音してしまい、「大学に行きます」と言ったつもりが「*退学に行きます」のように聞こえてしまう例が観察されます。また、調音点が歯茎の［z］から歯茎硬口蓋の［ʑ］にずれてしまった結果、「ありがとうございます」が「?ありがとうじゃいます」のように聞こえたり、調音法を間違えて、弾き音の［ɾ］が鼻音の［n］になってしまったために、「びっくりしました」が「*びっくにしました」と聞こえてしまうこともあります。こういった発音上の間違いは、意思の疎通や円滑なコミュニケーションに支障をきたす原因となる可能性があるため、注意が必要です。

次のページに、日本語の子音の調音点、調音法、声道断面図、IPA をまとめた表を示します。各子音の特徴について整理しておきましょう。

表 2.1　日本語の子音（調音点・調音法・声道断面図・IPA）

法＼点	両唇音	歯茎音	歯茎硬口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
鼻音	[m] マ行・ミャ行	[n] ナヌネノ	[ɲ] ニ・ニャ行		[ŋ] ガ行鼻濁音	[N] 後続音なしのン	
破裂音	[p] パ行・ピャ行 [b] バ行・ビャ行	[t] タテト [d] ダデド			[k] カ行・キャ行 [g] ガ行・ギャ行		
摩擦音	[ɸ] フ	[s] サスセソ [z] ザズゼゾ	[ɕ] シ・シャ行 [ʑ] ジヂ・ジャ行	[ç] ヒ・ヒャ行			[h] ハヘホ
破擦音		[ts] ツ [dz] ザズゼゾ	[tɕ] チ・チャ行 [dʑ] ジヂ・ジャ行				
弾き音		[ɾ] ラ行・リャ行					
接近音				[j] ヤ行	[ɰ] ワ		

練習問題　第2課　単音

【練習問題 1】

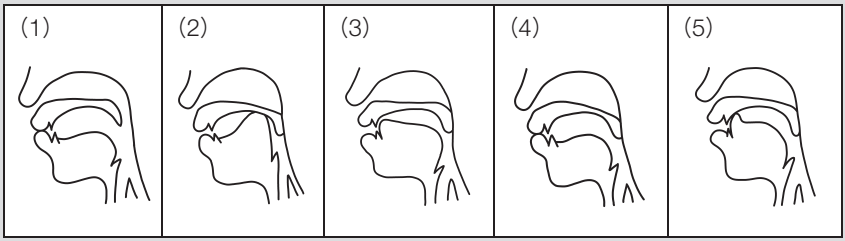
以下の (1)～(6) に挙げる語のペアは、それぞれ発音が 1 か所異なります。
その相違点を①～③の中から選んでください。

(1) カイコク / ガイコク　(2) デンキ / ネンキ　(3) ツウカ / チュウカ
(4) シンロ / シンド　(5) ヒロイ / シロイ　(6) カシ / カチ

① 調音点　② 調音法　③ 声帯振動の有無

【練習問題 2】

以下に示す (1)～(5) 声道断面図はどんな子音を調音しているときの形状ですか。
選択肢の中から選んでください。※以下の図では有声音と無声音の区別はしていません。



① [s]　② [n]　③ [ŋ]　④ [k]　⑤ [ɕ]
⑥ [m]　⑦ [t]　⑧ [ɾ]　⑨ [ɸ]　⑩ [b]

【推薦図書】

猪塚恵美子・猪塚元 (2003)『日本語の音声入門 解説と演習 全面改訂版』(日本語教師トレーニングマニュアル 1) バベル・プレス.
斎藤純男 (2006)『日本語音声学入門 改訂版』三省堂.
国際交流基金 (2009)『音声を教える』(国際交流基金日本語教授法シリーズ 2) ひつじ書房.